

主 題：七つの封印が解かれる5 —二人の証人—

聖書箇所：ヨハネの黙示録 11章1-14節

第六の御使いがラッパを吹き鳴らしました。神のさばきが下されました。そして、第七の御使いがラッパを吹き鳴らす前に小休止があったことを、10章1節から学んで来ました。ちょうど、括弧の中に包まれたように、10：1から今日私たちが見ていく11：14までがその箇所です。そして、11：15になると、第七番目の御使いがラッパを吹き鳴らす様子が記されています。

11：1を見ると、主はヨハネに命令を与えています。そこから見ていきましょう。

A. ヨハネに与えられた命令 1, 2節

1. 肯定的な命令

「測りなさい」という命令です。1節の初めに「それから、私に杖のような測りざおが与えられた。」と書かれています。進む前にこの「測りざお」について、どういうものだったのかを見ましょう。

測りざお：これは葦で作った測りざおです。葦の茎は真っ直ぐで長さが2.5mから3m位です。建築の時の測量用のさおとしてこの葦の茎が用いられたのです。エゼキエル書4：3, 5「：3 主が私をそこに連れて行かれると、そこに、ひとりの人がいた。その姿は青銅でできているようであり、その手に麻のひもと測りざおとを持って門のところに立っていた。」「：5 そこに、神殿の外側を巡って取り囲んでいる壁があった。その人は手に六キュビトの測りざおを持っていた。その一キュビトは、普通の一キュビトに一手幅を足した長さであった。彼がその外壁の厚さを測ると、一さおであり、その高さも一さおであった。」、42：16-19「：16 彼が測りざおで東側を測ると、測りざおで五百さおであった。：17 北側を測ると、測りざおで五百さおであった。：18 南側を測ると、測りざおで五百さおであった。：19 彼が西側に回って測りざおで測ると、五百さおであった。」、

「葦はイネ科の植物、湿地また池沼地帯に生える。イスラエルではガリラヤ湖のほとりにたくさん生えている。また、死海は塩の海であるが、西岸に一部葦を生じている。＝新聖書辞典より＝」

1節に見る「測りざお」は聖書の欄外に「葦」と説明されています。これがヨハネに与えられました。

「すると、こう言う者があった。…」と、だれかがヨハネに語るのです。いったい、この人物がだれであったのかは分かりません。10章から見ていくと、ひとりの強い御使いであった可能性があるし、また、別の御使いであった可能性もあります。この箇所でははっきりとそのことを教えていません。ただ、ヨハネにこういう命令を与えます。「立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。」と。これがヨハネに与えられた命令です。この御使いはヨハネに対して次の三つのものを測るようにと言いました。

ただ、この箇所を見ると、ヨハネは建物の大きさを説明していません。つまり、ここで意図されていることは、大きさを測ることではなくてある別の意味をもっているのです。実は、この「測る」ということについて、チャールズ・ファインバーグという先生は「この『測る』は自分自身の所有物を他のものと区別するという概念を伝えている。」と言います。つまり、「測るように」と言われたものは、それを命じた人の所有物なのだ、それとそうでないものとを区別するようにと、そのことを御使いはヨハネに命じたのだらうと…。マッカーサー先生も「旧約聖書においては、神は破壊のために『測るように』と命じられた。」と言われています。確かに、聖書を見ると、測ることによってそこを滅ぼすようにという命令が与えられています。「しかし、ヨハネの測りは神の所有の範囲を明確にし、所有権を表わしていると理解すべきである。」と。ですから、「測りなさい」と言われたなら、その測るものがだれに属しているのか？つまり、御使いはこの命令をヨハネに与えるのですが、これから「測りなさい」という三つのもの、「聖所、祭壇、そこに礼拝に来ている人々」、これらはすべて神に属するもの、神の所有物だということを表わしていると言います。そして、2節に「測るな」という命令が出て来ますが、それは「神に属していない」のです。恐らく、そのことをここで明らかにしようとしたのではないかと思います。

◎ヨハネに「立って、測るように」と命じられた三つのもの

1) 聖所：神殿のことです。最初に「測れ」と言われたのは「神殿」です。ということは、この患難時代に神殿が再建されるということです。非常に驚くことです。神殿と言うと一つではありません。イスラエルの歴史を振り返って見ると、いくつかの神殿がありました。

(1) ソロモン：これが最初の神殿です。950年BC位に建てられたものと言っていますが、ソロモンが建てた「ソロモンの神殿」です。I列王記8章に出て来ます。この神殿は586年BCにバビロンのネブカデネザル王によって滅ぼされます。

(2) ゼルバベル : 第二の神殿もありました。エズラ書3章に出て来ますが、ゼルバベルによって造られた第二番目の神殿です。これも168年BCに壊されたことが分かっています。

(3) ヘロデ : 主イエス・キリストがこの地上におられた時代、神殿はありました。ヘロデの神殿、第三番目の神殿です。これは70年ADに、ローマのテス將軍によって滅ぼされています。

こうして、三つの神殿が存在していました。AD70年から神殿は存在していませんでした。

(4) 患難時代 : 四つ目の神殿はこの患難時代の神殿です。この説明は後でしますが、エルサレムに再建されます。

マタイ24:15「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)」

マルコ13:14「『荒らす憎むべきもの』が、自分の立つてはならない所に立っているのを見たならば(読者はよく読み取るように。)ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。」

Ⅱテサロニケ2:4「彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。」

(5) 千年王国の時代 : 第五番目の神殿が存在します。それは主イエス・キリストがこの地上に帰って来られて千年王国を築かれるときに、そこに第五番目の神殿があるのです。

イザヤ66:20-23「:20 彼らは、すべての国々から、あなたがたの同胞をみな、【主】への贈り物として、馬、車、かご、騾馬、らくだに乘せて、わたしの聖なる山、エルサレムに連れて来る」と【主】は仰せられる。「それはちょうど、イスラエル人がささげ物をきよい器に入れて【主】の宮に携えて来るのと同じである。:21 わたしは彼らの中からある者を選んで祭司とし、レビ人とする」と【主】は仰せられる。:22 「わたしの造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くように、——【主】の御告げ——あなたがたの子孫と、あなたがたの名もいつまでも続く。:23 毎月の新月の祭りに、毎週の安息日に、すべての人が、わたしの前に礼拝に来る」と【主】は仰せられる。」

エゼキエル40-48章「40:1 私たちが捕囚となって二十五年目の年の初め、その月の十日、町が占領されてから十四年目のちょうどその日、【主】の御手が私の上にあり、私をそこへ連れて行った。…:5 そこに、神殿の外側を巡って取り囲んでいる壁があった。…」

ゼカリヤ6:12, 13「:12 彼にこう言え。『万軍の【主】はこう仰せられる。見よ。ひとりの人がいる。その名は若枝。彼のいる所から芽を出し、【主】の神殿を建て直す。:13 彼は【主】の神殿を建て、彼は尊厳を帯び、その王座に着いて支配する。その王座のかたわらに、ひとりの祭司がいて、このふたりの間には平和の一致がある。』」

このように記されています。この千年王国が終わった後、新天新地が築かれるのですが、そのときに神殿は存在するのでしょうか？黙示録21:22を見ると、そこには神殿が存在しないことが記されています。「私は、この都の中に神殿を見なかった。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。」、ですから、五つの神殿が存在し、存在するようになるのです。

☆患難時代の神殿

今、私たちが見たいのは、第四番目の「患難時代の神殿」です。ダニエル書の9章、また、11章や12章を見ると、そこで再びいけにえがささげられる様子が記されています。

9:27「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現れる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」

11:31「彼の軍隊は立ち上がり、聖所ととりでを汚し、常供のささげ物を取り除き、荒らす忌むべきものを据える。」

12:11「常供のささげ物を取り除かれ、荒らす忌むべきものが据えられる時から千二百九十日がある。」患難時代に神殿がエルサレムに再建されるのです。

ダニエル書9章を見ましょう。9:24-27にそのことが書かれています。「:24 あなたの民とあなたの聖なる都については、七十週が定められている。それは、そむきをやめさせ、罪を終わらせ、咎を贖い、永遠の義をもたらし、幻と預言とを確証し、至聖所に油をそそぐためである。:25 それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、油そそがれた者、君主の来るまでが七週。また六十二週の間、その苦しみの時代に再び広場とほりが建て直される。:26 その六十二週の後、油そそがれた者は断たれ、彼には何も残らない。やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。その終わりには洪水が起こり、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現れる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」、今、時間の関係で詳しく見ることはできません。

●25節「それゆえ、知れ。悟れ。引き揚げてエルサレムを再建せよ、との命令が出てから、」と、この命令が出たのが、ペルシャの王、アルタスタタ治世の第二十年目です。エルサレムを再建せよとの命令です。

445年BCのことです。ネヘミヤ書2:1-8にこのように記されている通りです。「アルタシャスタ王の第二十年のニサンの月に、王の前に酒が出たとき、私は酒を取り上げ、それを王に差し上げた。これまで、私は王の前でしおれたことはなかった。:2 そのとき、王は私に言った。「あなたは病気でもなさそうなのに、なぜ、そのように悲しい顔つきをしているのか。きっと心に悲しみがあるに違いない。」私はひどく恐れて、:3 王に言った。「王よ。いつまでも生きられますように。私の先祖の墓のある町が廃墟となり、その門が火で焼き尽くされているというのに、どうして悲しい顔をしないでおられましょうか。」:4 すると、王は私に言った。「では、あなたは何を願うのか。」そこで私は、天の神に祈ってから、:5 王に答えた。「王さま。もしもよろしくて、このしもべをいれてくださいますなら、私をユダの地、私の先祖の墓のある町へ送って、それを再建させてください。」:6 王は私に言った。——王妃もそばにすわっていた——「旅はどのくらいかかるのか。いつ戻って来るのか。」私が王にその期間を申し出ると、王は快く私を送り出してくれた。:7 それで、私は王に言った。「もしも、王さまがよろしければ、川向こうの総督たちへの手紙を私に賜り、私がユダに着くまで、彼らが私を通らせるようにしてください。:8 また、王に属する御園の番人アサフへの手紙も賜り、宮の城門の梁を置くため、また、あの町の城壁と、私が入る家のために、彼が材木を私に与えるようにしてください。」私の神の恵みの御手が私の上にあったので、王はそれをかなえてくれた。」

●この命令が出てから、「油そそがれた者、君主の来るまでが…」とあります(25節)。これは主イエス・キリストのことです。イエスが来るまでに「七週。また六十二週」、つまり、六十九週あるということです。「一週」は「七年」とカウントします。すると、7年×69=483年となります。445年BCに命令が出てから救世主が来られるそのときまで483年であると言います。それを計算した人がいます。ロンドン警視庁の警視官であり神学者であった非常にユニークな経歴をもっているサー・ロバート・アンダーソンという学者ですが、彼によると「445年BCのニサンの月の10日、4月6日から数えて483日目、それは、32年ADニサンの月の10日であって、その日にイエスがエルサレム入城を果たされた。ということで、この預言が成就した。」と言うのです。

●26節「その六十二週の後、油そそがれた者は断たれ、」、つまり、キリストは殺されるということです。私たちが今見たいのは、その後です。「彼には何も残らない。やがて来たるべき君主の民が町と聖所を破壊する。」と、これはエルサレムを破壊するということです。だれがそれをするのか?「来たるべき君主の民」です。続いて見てください。「その終わりには洪水が起り、その終わりまで戦いが続いて、荒廃が定められている。:27 彼は一週の間、」、この「彼」とは「来たるべき君主」のことです。「多くの者と堅い契約を結び、」、「多くの者」とはイスラエルの人々です。「半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。」、ということは、そのときまで「いけにえとささげ物をささげること」を許していたということです。

●26節には「来るべき君主」のことが記されています。27節には、この君主は一週の間、すなわち、7年の間に「多くの者と堅い契約を結び、」と約束されています。イスラエルと契約を結んで一週の間、つまり、7年間、最初はイスラエルに平和を約束し、エルサレムに神殿を再建することを許可し、そして、民がいけにえをささげることが許可するのです。

今、エルサレムに行ったらこの神殿があった場所に行くと、イスラム教の大きなモスクが建っています。「岩のドーム」と言われるモスクです。どう見ても、そこを壊してそこにイスラエルが神殿を建てるなど、人間的には考えられません。しかし、それが聖書の預言です。神殿が再建され、人々は再びいけにえをささげるようになる。それを許可するのがこの「来るべき君主」なのです。

では、いったいこの「来るべき君主」とはだれなのでしょう?もうすでに私たちは黙示録の中にそれを見て来ました。思い出してください。6章に、封印が解かれるときに白い馬に乗った人物のことが記されています。これは人ではなく「さばきに伴う出来事である」と見ました。どのようなさばきがもたらされるのか?最初にもたらされる神のさばきは「平和」であると見ました。神のさばきが下る前にこの地上に平和が訪れると。この平和は神が与えることのできる、また、神が約束されている本当の平和ではなくて、一時的な偽りの平和であると見ました。これをもたらす者がいるのです。恐らく、この人物は戦争によってではなく、世を騙すことによって世からの信頼を勝ち取り、平和的方法をもって影響力、支配力を拡大していく人物でしょう。聖書はこの人物のことを「偽キリスト」と呼んでいます。自らを救世主として多くの人を信じさせるのでしょう。「偽キリスト」というだけに、非常に救世主的な影響力を与えます。でも、救世主ではありません。

これまでのことをまとめるとこのようになります。患難時代にこの偽キリストはイスラエルと契約を結び、彼らに平和を約束します。そして、神殿を建てる許可を与え、神殿でいけにえをささげることが許可します。ところが、彼はその約束をいつまでも守りません。3年半ほど経ったときに、彼はその約束を反故にし、自分自身を神として、すべての人の崇拜を求めるのです。

このようなことが、この黙示録を見るときに、また、みことばを見るときに教えられることです。最初の命令は「神殿を測る」ことでした。患難時代に神殿が存在するのです。今、私たちはこの世界の歴

史の証人です。これからどうなっていくのかを今見ています。必ず、その方向に進んでいきます。神が約束されたその通りに世の中は進んでいきます。関心をもって見ていくことです。あのイスラエルに何が起こるのか？聖書はこのような預言を与えています。

さて、今日のテキストに戻しましょう。

2) 祭壇 : 二つ目に測るようにといわれたのは「祭壇」でした。この「祭壇」はもう何度も見て来たように、香を炊く祭壇ではなくて、聖所の外にある「全焼のいけにえをささげるための祭壇」です。

3) 礼拝する人々 : 神殿の周りに集まって主を礼拝していた人たちのことです。つまり、神殿をもう一度思い出していただくと、神殿の中には聖所があって、その先に至聖所があります。その前に祭司だけが立ち入ることのできる場所があり、外側に向かって、イスラエルの男性だけが立ち入る庭、そして、ニカノルという門の外側には女性が立ち入ることのできる庭がありました。これが神殿です。

ここに記されている三つのこととはこの神殿のことです。ですから、このメッセージを聞いたヨハネは、このすべてのものは主に属するものである、世の中では大変なことが起こっているが、神はちゃんとご自分の神殿を、そして、そこに仕える者たちを守られると、その確信を得て大きな慰めをいただいたことでしょう。また、その当時、このメッセージを聞いた多くのユダヤ人たちは「神が私たちを守ってくださるのだ」という確信を改めて強めたことでしょう。

2. 否定的な命令 2節

ここには「否定的な命令」があります。

1) 命令の内容

「差し置きなさい」と書かれています。2節「聖所の外の庭は、異邦人に与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。」、神殿の外側です。異邦人はここに入ることができましたが、それ以上中に入っていくことはできなかった。もし、そうするならその場で殺されるのです。

2) 命令の理由

なぜ、この「異邦人の庭」を測ってはならないのか？その理由が書かれています。「測ってはいけない。彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みにじる。」と。異邦人が四十二か月、すなわち、3年半です。神殿を踏みにじると、先に見たように、偽キリストが神殿にあって自らを上げて、自らが神であることを宣言し、人々に崇拝を要求するということです。次のように記されている通りです。Ⅱテサロニケ2:4「彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。」、黙示録13:5「この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威を与えられた。」、

ですから、この1, 2節を見たときに、「測りなさい」「測ってはいけない」という命令ですが、「測りなさい」というものはすべて「良いもの」で「測ってはいけない」というのは「悪いもの」です。「良いもの」はすべて神の所有物、神に属するものであって、それゆえに、神は常に彼らを祝福し彼らを守られると、そのことを明らかにしました。しかし、そうでない「悪いもの」は神の怒りがその上に留まる、神のさばきが下ることを明らかにされたのです。

B. ふたりの証人 3-12節

3節からは「二人の証人」が出て来ます。

1. 彼らの務め 3、4節

1) 証し人として語る 3節

「それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。」、「彼らは荒布を着て」とあります。人が荒布を着るのはどんなときですか？思い出してください。罪を悔い改めるときです。つまり、このふたりの証人が語るメッセージは「悔い改めのメッセージ」だったということです。恐らく、皆さんは「悔い改めのメッセージ」と聞かれても何も違和感を感じないでしょう？でも、残念ながら、福音派の中には「悔い改めのメッセージ」ということばを聞くだけで違和感をもつ人たちがいます。今、「福音」という救いのメッセージの中に「悔い改め」を要求することが非常に少なくなっているからです。天国と地獄とどちらに行きたいですか？「天国…」、では、イエスを信じなさいと言います。罪を悔い改めてイエス・キリストが備えられた完全な救いを心から受け入れて救いをいただきなさいと、つまり、罪を悔い改めること、罪の悔い改めを強調するメッセージはいつの間にか教会から聞かれなくなってしまいました。

でも、皆さん、聖書が教える救いのメッセージは「悔い改めのメッセージ」です。バプテスマのヨハネはそのメッセージをしました。また、ペンテコステ以降、ペテロが多くのユダヤ人に語ったメッセージは悔い改めを命じています。そう聞くと、多くの人たちは「いや、確かに、彼らはユダヤ人だったから…」と言うかもしれません。しかし、使徒の働きに記されている教会が誕生していくその歴史を見ると、メッセンジャーは確実に同じメッセージをユダヤ人にも異邦人にも語っています。たとえば、

使徒 2 : 3 8 「そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けるでしょう。」

使徒 3 : 1 9 「そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。」

使徒 1 1 : 1 8 「人々はこれを聞いて沈黙し、「それでは、神は、いのちに至る悔い改めを異邦人にもお与えになったのだ」と言って、神をほめたたえた。」

使徒の働き 1 7 章には、パウロがアテネの町を訪問したときの様子が記されています。偶像でいっぱいであった異邦人の町です。そこでパウロはどのような福音のメッセージを語ったのか？このように言っています。

使徒 1 7 : 3 0 「神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」

使徒 2 0 : 2 1 「ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。」

使徒 2 6 : 2 0 「ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えて来たのです。」

対象がだれであれメッセージは変わっていません。神がメッセンジャーを通して語られたメッセージは、罪人に対して「罪を悔い改めて救いを信じなさい」でした。患難時代に備えられているこのふたりの証人も同じように悔い改めのメッセージをします。彼らがメッセージを語る期間は「1 2 6 0 日」と言います。その当時、ユダヤ人たちは1 年を3 6 0 日とカウントしていましたから、1 2 6 0 日は3 年と1 8 0 日、すなわち、3 年半です。その期間、このふたりの証人は神のメッセージを語り続けるのです。

2) 証し人として生きる 4 節

彼らは「証し人」として生きています。神が彼らを大いに用いておられます。「彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。」と。

・オリーブの木 : 燭台で油を燃やして明かりとしますが、そこで必要なのがオリーブの油です。

・燭台 : すでに黙示録 2 : 5 で見た通りこれは「教会」のことでした。「それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」「燭台」が教会から取り除かれてしまうと言っています。確かに、教会の存在自体がなくなってしまう可能性があります。エペソの教会はもうありません。すばらしい教理が教えられた教会でしたが、もう存在していません。ですから、確かに、教会がその存在を失ってしまうと、そのことを私たちは歴史を通して知っています。しかし、その前に失うのは「明かり」です。つまり、「証」のことです。

この 1 1 : 4 では「証」のことを言っているのです。というのは、これと非常によく似た記事が旧約聖書のゼカリヤ書 4 章に出て来ます。4 : 1 - 1 4 「1 私と話していた御使いが戻って来て、私を呼びさましたので、私は眠りからさまされた人のようであった。:2 彼は私に言った。「あなたは何を見ているのか。」そこで私は答えた。「私が見ますと、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には、鉢があり、その鉢の上には七つのともしび皿があり、この上部にあるともしび皿には、それぞれ七つの管がついています。:3 また、そのそばには二本のオリーブの木があり、一本はこの鉢の右に、他の一本はその左にあります。」:4 さらに私は、私と話していた御使いにこう言った。「主よ。これらは何ですか。」:5 私と話していた御使いが答えて言った。「あなたは、これらが何か知らないのか。」私は言った。「主よ。知りません。」:6 すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は仰せられる。:7 大いなる山よ。おまえは何者だ。ゼルバベルの前で平地となれ。彼は、『恵みあれ。これに恵みあれ』と叫びながら、かしら石を運び出そう。」:8 ついで私に次のような【主】のことばがあった。:9 「ゼルバベルの手が、この宮の礎を据えた。彼の手が、それを完成する。このとき、あなたは、万軍の【主】が私をあなたがたに遣わされたことを知ろう。:10 だれが、その日を小さな事としてさげすんだのか。これらは、ゼルバベルの手にある下げ振りを見て喜ぼう。これらの七つは、全地を行き巡る【主】の目である。」:11 私はまた、彼に尋ねて言った。「燭台の右左にある、この二本のオリーブの木は何ですか。」:12 私は再び尋ねて言った。「二本の金の管によって油をそそぎ出すこのオリーブの二本の枝は何ですか。」:13 すると彼は、私にこう言った。「あなたは、これらが何か知らないのか。」私は言った。「主よ。知りません。」:14 彼は言った。「これらは、全地の主のそばに立つ、ふたりの油そそがれた者だ。」

預言者ゼカリヤの時代に二人のリーダーが存在しています。一人は大祭司ヨシュア、もう一人はゼルバベルでした。この二人の証人は神の力によって強められながら用いられたのです。証し人、つまり、燭台としての二人に油が与えられて彼らが用いられたように、黙示録のこの二人の証人も同様に大切な

働きを、神の助けをいただきながら行うということを示したのです。ゼカリヤ4：6に「これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は仰せられる。」とありますが、これは「このすばらしい神が与えた働きを、もって生まれた才能や自分の力によって為すのではなく、神の力によって神の恵みによって為す」ということです。どの時代でも同じことです。

11：4に書かれている「二本のオリーブの木、また二つの燭台」とは、二人の証人たちは神の助けをいただきながら「証を為す」という務めを行ない続けていくということです。神が彼らを強めて神が彼らを用いられるということです。それゆえに、彼らは大変な働きをします。

2. 彼らの力 5、6節

1) 彼らの敵を滅ぼす力 5節

「彼らに害を加えようとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。」と大変恐ろしいことが記されています。この3年半の間、だれも彼らに害を加えることはできない、もし、そうしようものなら、その者は殺されると言います。それは、この3年半の間、神が彼らを使って彼らに福音のメッセージを語らせるからです。こうして、すべての人々は福音のメッセージを聞くのです。もちろん、この時、福音宣教をしていたのは彼らだけではありません。14万4千人のユダヤ人たちが居ます。彼らも伝道しています。そうでない、異邦人のクリスチャンたちも救われた者たちはイエス・キリストの福音を伝えているでしょう。でも、特別にこの二人の証人たちはこうして神に守られて福音を語り続けるのです。彼らが語ったメッセージは救いのメッセージです。しかし、彼らを妨げたり彼らの働きを邪魔する者たちは滅びました。それは次のことを意味します。「神のメッセージを拒み、それを受け入れなければ、そこには必ず神によるさばきがある」と。彼らの働きを邪魔した者は殺されたのです。永遠のさばきに至り、そのさばきを逃れること、そのさばきを回避することは人間にはできません。彼らは大変な力をもっていることを教えます。

2) 自然界を支配する力 6節

6節では、その力は自然界を支配する力であることが教えられています。「この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている。」、

(1) 雨を支配 : 3年半の間、雨が降らないということです。つまり、この期間は世界的に干ばつが続くのです。

(2) 水を血に変える : そのような力をもっているのです。

(3) 災害を与える : 彼らが3年半、この働きをするときに、地上にはいくつかの災害、災いが下ったことを私たちは見ることができます。

彼らはこのようなことを行なう力を持っている、だから、世界中の人たちは彼らを憎むのです。

3. 彼らの死 7－10節

7節から10節にはこの二人の「死」のことが書かれています。

1) 獣との戦い 7節

7節「そして彼らがあかしを終えると、」、3年半の働きを終えると、「底知れぬ所から上って来る獣が、彼らと戦って勝ち、彼らを殺す。」、この「獣」はある人たちは「サタン」ではないかと言います。でも、これはサタンではありません。12章をご覧ください。3節と9節「:3 また、別のしるしが天に現れた。見よ。大きな赤い竜である。七つの頭と十本の角を持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。」「:9 こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。」、この箇所では「竜」が「サタン」であると教えています。ですから、「獣」はサタンではありません。この獣は「底知れぬ所から上って来る」のです。そこは罪を犯した悪霊たちが閉じ込められているところです。この「獣」は天使ではなく「人間」のことです。彼はそこに閉じ込められていたのではありません。閉じ込められていた悪霊たちの力を受けて働きを為す人物のことです。

いったい、だれのことか？この人物は世界のリーダーとしての力をもっている存在です。お分かりですね？偽キリストのことです。この偽キリストが二人の証人たちと戦って、彼らを殺すということがこの7節に書かれているのです。

2) エルサレムでの殉教 8節

8節をご覧ください。「彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。」、彼らの死体は「大きな都の、」とはエルサレムのことです。エルサレムの大通りにこの二人の死体がさらされると言います。このことは古代においては恥辱を与えるものです。なぜなら、二人の証人は憎まれていたからです。その様子が次に記されています。9－10節「:9 もろもろの民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を墓に納めることを許さない。:10 ま

た地に住む人々は、彼らのことで喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う。それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。」、この二人の証人たちの死を、全世界のイエス・キリストを信じていない救いに与っていない者たちが喜んでる姿が描かれています。

その前に、8節に「彼らの死体は、霊的な理解では」とありますが、「霊的な理解」とは「霊的だ」ということです。つまり、このエルサレムの霊的な状態はまさにあのソドムの町のように、また、エジプトのようであったと言うのです。霊的に大変に墮落した状態です。なぜなら、偽キリストが自らを神として崇拜を求めるようなことがエルサレムで行われるからです。これがエルサレムだということが8節の後半に書かれています。「彼らの主もその都で十字架につけられたのである。」と、どこか？ということとははっきりしています。エルサレムです。

そこで殺された二人の証人たち、ありとあらゆる人々が彼らの死体をながめている、そして、「その死体を墓に納めることを許さない。」のです。先に言ったように、彼らを辱めるためです。多くの人たちがそこを訪れたのか？というと、もちろん、エルサレムにはいろんな国の人たちがいるでしょう。恐らく、世界中の人たちがこの二人の死をメディアを通して知っているはずで。そんな時代ですから…。臨時ニュースが報道されて二人が殺された様子が流れることでしょう。そこにいなくても、多くの人たちは二人の死を「喜び祝って、互いに贈り物を贈り合う。」のです。「それは、このふたりの預言者が、地に住む人々を苦しめたからである。」と言います。どのようにして彼らは人々を苦しめたのか？彼らに害を加える者たちは殺されました。雨が降らず干ばつを経験しました。様々な災害を彼らは地にもたらした…。そして、何よりも、彼らの語ったメッセージです。罪を悔い改めなさいというメッセージを聞いたときに、罪を愛している人たちはそれは一番聞きたくないこと、耳障りなメッセージです。そこで、この厄介な者たちを殺してしまおうと、イエスがおられたときと全く変わっていません。

こうしてこの二人をやっと殺した、邪魔者がいなくなった、そうして世界中の主の救いに与っていない者たちが喜んだその様子が書かれています。そして、その後、何が起こるのか？

4. 彼らのよみがえり 11、12節

「11 しかし、三日半の後、神から出たいのちの息が、彼らに入り、彼らが足で立ち上がったので、それを見ていた人々は非常な恐怖に襲われた。12 そのときふたりは、天から大きな声がして、「ここに上れ」と言うのを聞いた。そこで、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。」、

1) よみがえり 11節

(1) いのちの息が彼らに入った : まさに、神ご自身がいのちの源であること、神から出たいのちの息によってこうして人間は生きるものになります。

(2) 人々に大変な恐れが生じた : 死んだ状態にあった、だれが見ても確実に死んでいるこの二人、その死を喜んでいた世界が、神によってよみがえらされた二人をみて恐れおののくのです。大変なことがこの二人に起こるのです。恐らく、みな見えています。特派員もたくさんいたでしょう。どのようにしてこのメッセージを全世界に配信していくのか？三日半前に死んだこの二人が両足で立ち生きています。死んでいた彼らがよみがえったのです。世界的なパニックが起こります。その様子がここに記されています。

2) 天への凱旋 12節

主は彼らがこの地上に残って継続して福音宣教の働きをすることをお許しにならなかった。主は彼らが天に凱旋することを命じられました。「そこで、彼らは雲に乗って天に上った。」のです。恐らく、世界中の人々がその光景を見るのでしょう。その後を見てください。神のさばきが下ります。

C. 神のさばき 13節

「そのとき、大地震が起こって、都の十分の一が倒れた。この地震のため七千人が死に、生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。」、

1. 大地震によって都の十分の一が破壊され、7,000人が死んだ

この「都」は先ほどから見てるように「エルサレム」のことです。このエルサレムが地震によって壊滅的な打撃を受けるのです。そして、7,000人の人々が死んでしまいます。患難時代のこのときまで、世界中に大変なことが起こっています。今のこの美しい世界ではないのです。たくさんの人々が亡くなり、太陽は暗くなっているし、大変な時代に彼らは生きています。

2. 生き残った者たちは、恐れを抱き、神を崇めた

「生き残った人々は、恐怖に満たされ、天の神をあがめた。」と、恐らく、このことがエルサレムで起こるのでしょう。このような光景を見て、これらの災害から逃れた多くのユダヤ人たちは、これまで心を頑なにしていた彼らは主の前に心を開くのでしょう。これまでとは異なった対応がここで為されています。彼らは心を開き「天の神をあがめた」のです。

こうして見ていくときに、私たちは改めて教えられませんか？神はどこまであわれみ深いお方なの

か？と。さばきを下しても下しても、人々は心を頑なにして神の前に心を開かなかった。でも、神は「もういい！」とは言われなくて、それでもなお救いの御手を差し伸べておられます。最後の第七番目の御使いがラッパを吹く前に、最後のさばきが下る前に、神はまたこうして罪人を救いへと導かれるのです。私たちには考えられない神を私たちは信じているのです。私たちの神は私たちの理解を越えた神です。ここまであわれみを示されるのです。

D. 最後の災いへの警告 14節

「第二のわざわいは過ぎ去った。見よ。第三のわざわいがすぐに来る。」と。第三の災いが来るのがここで約束されました。しかも、それは「すぐに来る。」と。もうそこまで来ているということを使うのです。そして、15節からは「第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。」と、いよいよ最後のさばきがこの後下って行くのです。このようなときに至るまで、神はあわれみを示し続けておられるのです。

信仰者の皆さん、このようなすばらしいあわれみに満ち溢れた、罪人を喜んで赦してくださるこの救い主を私たちは語るのです。このようなすごい神がおられるのです。私たちの欲しいものを与えてくださると、そうして人間が作り出した偶像ではありません。それらは手があっても私たちを罪から救い出すことはできません。この全世界をお造りになり、いのちの息をもって私たちを生ける者としてくださった方、この方だけが人を新しく生まれ変わらせることができます。そんな神がおられること、そんな神による救いがあることを私たちは語るのです。その使命を私たちは忘れてはいけません。

私たちが考えなければいけないことは、私たちが天国に行けることよりも、私たちの愛する者たちが今、永遠の滅びに向かっている、その人たちのことです。私たちはもうどこに行くのか決まっています。神がその約束をくださったのです。私たちのことを心配する必要はありません。心配しなければいけないのは、まだ、その約束をいただいていない私たちの愛する者たちのことです。思い出してください。その務めが私たちに与えられていることを。神はその務めをあなたに与え、そして、その務めを果たすためにこの日をあなたに与えてくださっていることを。

ひとり一人に与えられているその責任をしっかりと果たすことです。私たちに語るべきメッセージがあります。私たちが語りたい救い主がおられます。その救い主を、その方によるすばらしい救いを、どうぞ、この1週間、しっかりと語り続けてください。

《考えましょう》

1. 「測る」とはどういう意味かを説明してください。
2. 二人の証人たちの宣べ伝えたメッセージについて説明してください。
3. 「獣」と「竜」について説明してください。
4. この二人の証人たちの働きの力は、どこから与えられていましたか？
私たちがこのことから何を学ばなければなりませんか？